國學院大學学術情報リポジトリ

サマセット・モーム『働き手』研究：チャールズ・バットルのミッドライフ・クライシス

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-24 キーワード (Ja): 英文学, W. サマセット・モーム, 戯曲, 心理学, ライフサイクル理論 キーワード (En): 作成者: 藤野, 敬介 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000082

サマセット・モーム『働き手』研究：
チャールズ・バットルのミッドライフ・クライシス

藤　野　敬　介

I

『働き手』（*The Breadwinner*, 1930）は、ウィリアム・サマセット・モーム（William Somerset Maugham, 1874-1965）の「後期四作」（「問題劇四作」として括られることもある）として知られる、彼が劇壇から引退し小説に専念することを決意してから書いた劇作のうち、2 番目に上演されたものである。後期四作は、最初の作品である『聖火（*The Sacred Flame,* 1928）』の後、『働き手』、『報いられたもの』（*For Services Rendered*, 1932）、『シェピー』（*Sheppey*, 1933）の順に上演され、モームは四半世紀にわたった劇作家としてのキャリアに自ら幕を下ろした。

これら 4 作品が書かれた経緯については、拙論「サマセット・モームの『聖火』における三つの愛」（Walpurgis 2023）の中ですでに説明済みであるので、ここで繰り返すことは避けるが、一つだけ言及しておきたいのが、モームはこの四つの劇については、観客受けの良さそうな順に（つまり、興行成績が次第に下がっていくように）上演の順番を決め、自らの作品の評判を最後まで落とさないように配慮したということである。そうすることで、劇場側への負担を最大限に抑えようとしたのであるが、その結果、『聖火』と『働き手』）はかなりの成功を収め、『報いられたもの』と『シェピー』）は予想通りの不入りとなった。

『働き手』の主人公チャールズ・バットル（Charles Battle）は、40 代前半の既婚男性で証券会社の経営者。投機に失敗した顧客が自殺し、その煽りを受けて彼自身も苦境に立たされている。決められた期日までに清算金を支払わねば、株式市場での取引が停止され会社が破綻するという状況で、幸いにも取引銀行頭取の好意によって必要な資金の調達に成

功するが、彼は自らの意志で援助を断り会社を倒産させる。そして、その事実を知って驚く家族の面前で、チャールズは、海外に投資してある財産の 4 分の 3 を家族に与え、残りを自分が受け取り、外国へ行って独り気ままに暮らすつもりなのだと宣言する。

チャールズのこの突然の変節は、しばしばモームの代表作『月と六ペンス』（*The Moon and Sixpence,* 1919）の主人公で、同じ名前を持つ、チャールズ・ストリックランド（Charles Strickland）の出奔と比較される。画家ポール・ゴーギャン（Paul Gauguin, 1848-1903）をモデルに書かれたこの小説では、ストリックランドもまた 40 歳になるまで、ロンドンの一証券業者として平凡な生活を送っていた。ところが、彼は不意に僅かばかりの所持金を手に家族を捨ててパリへと逃奔し、安アパートの屋根裏部屋で喰うや喰わずの生活をしながら絵を描き始めるのである。

二人のチャールズの行動は、「現状からの脱却」という点においては似通っているものの、その動機には大きな差がある。ストリックランドには、自らの芸術の完成という明確な目標があるのだが、バットルには「自由で偽りのない人生を生きたい」という想いしかない。しかも、彼はそうした人生を送るための具体的な計画を何ら持ち合わせておらず、海外で「ロマンスを売り歩くセールスマン」なることに関心があるのだという曖昧なビジョンを語るのみである。（『働き手』 269）つまり、ストリックランドが傍からは無謀に見えながらも、自らに残された時間の中で目標に向かって一心不乱に最短のルートを突き進んでいるのに対して、バットルは最低限の収入を確保するなど用意周到に見えて、実のところ場当たり的なのである。

さて、そうしたチャールズ・バットルの心変わりの理由については、劇中で本人から一応の説明がなされているものの、どうも要領を得ないというのが筆者の印象であった。冷静に自己分析をしているように見えるチャールズではあるが、実際のところは彼自身にも自らに何が起こっているのかを正確には判断出来ていないように思えたのである。

筆者は、ヒプノセラピー（催眠療法）という心理療法のセラピストでもあることから、チャールズの精神状態を理解するために、精神医学や

心理学の観点から捉えることを試みた。すると、彼の出奔には、心理学のライフサイクル理論における「ミッドライフ・クライシス（中年の危機）」の影響があったのではないかという仮説に行き着いた。とりわけ、精神科医の小此木啓吾（1930-2003）が自らの「中年の危機」論の中で提唱した「惑い」「上昇停止症状群」「視界ゼロの生き方」という考え方が、チャールズの精神状態の解明の一助になるとの考えに至った。そこで本論では、小此木の論を視座に、チャールズ・バットルのミッドライフ・クライシスについて考察してみたいと思う。

II

まずは、『働き手』の概要を述べる。本作の正式なタイトルは *The Breadwinner: A Comedy in One Act*（働き手：一幕の喜劇）で、一幕三場の喜劇である。ただし三場とはいっても、舞台上で場面や時の転換は一切起こらない。これの意味するところは、この劇が本来は一気に上演され得る構成の作品だということである。とは言え、一幕物ではあっても多幕物に匹敵する長さを持つ劇であることから、便宜的に二度幕を降ろしてわざわざ三場構成にしたということが考えられる。実際、ト書きには「観客の休憩のため、途中で二回幕が下りる」と明記されており、そのように不自然に中断された劇の流れを戻すためであろうが、第二場と第三場の冒頭部分では、最初に前場の終わりの部分を少しだけ巻き戻して演じるという工夫がなされている。(『働き手』 137)

舞台はバットル家の応接間。時はこの作品が書かれた 1930 年のある日の午後 3 時を挟んだ前後 2、3 時間という設定になっている。ちなみに、劇中で重要な意味を持つことになる第一次世界大戦終結からは、12 年が経過している。

登場人物はバットル家とグレンジャー家の家族で、証券会社を経営している主人公のチャールズ（チャーリー）・バットル、妻マージェリー（Margery Battle）、息子パトリック（Patrick）、娘ジュディー（Judy）、チャールズの友人で事務弁護士のアルフレッド・グレンジャー（Alfred

Granger)、妻ドロシー（Drothy)、娘ダイアナ（Diana)、息子ティモシー（Timothy）の 8 人である。

第一場の幕が上がると、舞台上にはパトリックとジュディーが登場し、すぐにダイアナとティモシーが加わる。この 10 代の 4 人の若者は、勝手気ままなお喋りを始める。例えば、40 歳を超えた人間は生きていても価値がないから、国家は一定の年齢に達した人間を安楽死させるように法律で定めるべきだとか、親は自分のしたい放題のことをしているのに、子供の自由を束縛しているのは不公平だとか、安楽死が無理なら親は 40 歳で引退し、全財産を子供に譲るべきだといったように言いたい放題である。

そこへ子供たちの母親で、従姉妹同士のマージェリーとドロシーがやって来る。二人は子供たちを体よくテニス・コートへと追いやると、女同士の会話に花を咲かせる。晩餐会で出会った男の話から、退屈ではあったもののそれなりに満足している 19 年にわたる結婚生活へと話題が移り、この夏の休暇には夫たちを連れずにフレンチ・リビエラへ行けないかという計画が飛び出したところに、コートが未整備だったと文句を訴えつつ子供たちが帰って来る。喉が渇いたのでレモネードを飲みたいという子供たちを、今度はキッチンに追い払おうとしたところに、ドロシーの夫であるアルフレッドが訪ねて来る。

しばらく子供たちと軽口を交わしてから、アルフレッドは、チャールズを探して家まで来たのだとマージェリーに告げる。重大な要件で今朝チャールズと会うことになっていたのに、彼は姿を見せず会社にもいなかったのだと話す。そして、先日投機に失敗してある顧客が自殺したのだが、その煽りを受けてチャールズも苦境に立たされていることや、今日は証券取引所の決算日で、午後 3 時までに売買の清算金を支払わねば取引停止になり会社が倒産すること、またこの危機を脱するには取引銀行からの資金援助が不可欠であることについても語る。

アルフレッドが家族に、昨夜から今夜にかけてのチャールズの様子を尋ねるが、いつものように誰も彼のことを気にかけていなかったので、まともな答えは出てこない。そこでアルフレッドが電話で直接銀行の頭

取に問い合わせると、銀行が資金援助したことが判明し、一同は一先ず安堵する。しかし肝心のチャールズの所在がわからないので皆が心配している所へ、当の本人がにこやかに帰宅して第一場が終わる。

第二場では、朝からずっと散歩をしていたというチャールズが、危機到来後の自らの行動と心境の変化を語る。父の代から続いている自分の会社を誇りにし、顧客や関係者からの信頼も厚かった彼は、倒産の危機に見舞われた際、金策に奔走した。全財産を投げ出すことを決め、借金をしてでも会社を救い、自分の信用を守ることが大事だと考え、取引銀行頭取に掛け合い、必要な資金の調達に成功したのである。

ところが、この日の朝、勤め先へと急ぐ群衆の姿を見て、チャールズの心境が変化する。会社や信用を第一に考えていたのは、世俗的な考え方に囚われていたからであって、倒産はむしろ自分に偽りのない人生を生きる機会を与えてくれているのだと考えるようになったのだ。そして彼は、自らの意志で融資を断り、倒産に踏み切る。

驚く家族を後目に、チャールズは、海外に投資してある個人財産 2 万ポンドのうち、1 万 5 千ポンドを家族に与え、残り 5 千ポンドは自分が受け取り、その利潤で週 5 ポンドの最低生活費を確保し、外国へ行って独り気ままに暮らすのだと宣言する。

その話を聞いたアルフレッドは、男が仕事を捨てて家族を置き去りにするときはいつでもその裏に女性の姿があるのだと言って、チャールズに愛人がいるのだろうと問い詰める。だが、彼はそれを完全に否定し、後のことはすべて君に任せるとアルフレッドに告げると、荷物をまとめるためにその場から立ち去り、そこで第二場が終了する。

第三場の幕が上がると、チャールズは、4 人の女登場人物たち（ドロシー、ダイアナ、ジュディー、マージェリー）と次々に会話することになる。

まずは、ドロシーがマージェリーの代理としてチャールズと向き合う。アルフレッドの助言を受けたドロシーが、マージェリーにチャールズの情に訴えるべきだとアドバイスを送ったのだが、長い間女らしい愛情をもって夫に接して来なかったマージェリーにはその自信がないので、ドロシーにお膳立てを依頼したからである。快諾したドロシーはチャール

ズを呼び出すのだが、先にアルフレッドが言った「男が仕事も家庭も何もかも放り出す時は・・・金か女かが理由だ」という言葉が頭に残っていた彼女は、チャールズが実は自分を愛していて、その愛が報われないので家出するのだという妄想を口にして彼を呆れさせる。

次いでダイアナが登場し、自分を外国へ連れて行ってくれたら愛人になってあげると言ってチャールズを口説こうとする。彼が生活に困れば自分が稼いで養ってあげるし、自分に飽きたらいつでも捨ててもよいのだということまで口にするのだが、まったく相手にされずにしょげ込んでしまう。

それから、ダイアナと入れ替わる形で娘のジュディーが登場し、二人は素直な気持ちで言葉を交わす。ジュディーは今回のことを通じて、チャールズが思っていたよりもユーモアのセンスを持ち合わせていることを知り、これまで以上に父親のことが好きになったと告げる。チャールズも、自分はやりたいことをして残された人生を悔なく過ごすために家を出て行くのだと、自らの行動の理由を打ち明ける。そして、将来は女優になって自立したいと言う娘に、チャールズが父親としての心のこもった助言を与えると、彼女も自分が成功したら落ちぶれたお父さんを豪華マンションに住ませてあげると言い、心を通わせた二人は笑顔で別れる。

最後に妻のマージェリーが登場し、チャールズへの愛を口にするが、彼は言下にそれを否定する。若い頃の二人は確かにお互いに恋心を抱いていたのだが、やがてはその感情も消え去り、戦争で 5 年間離れ離れになった後には、心がすっかり離れてしまったからである。それでも結婚生活を続けていた二人であったが、それは双方にとって「面白くなかった」のである。(263) それゆえ、チャールズは妻の元を離れることを決意したのだと告げるが、マージェリーは到底納得することができない。彼女は、愛情が無かったとしても、夫たる者は最後まで家族を扶養する義務があると主張する。しかし、そのような言葉とは裏腹に、別居生活によって新しい恋の機会を得られるかも知れないという期待に胸を躍らせていることをチャールズに見抜かれた彼女は言葉を失い、ジュディーと共に彼を見送る場面で舞台の幕が下りる。

III

前述した通り、チャールズはジュディーとの会話の中で、自らの出奔の動機を明かしている。

> **ジュディー**　どうして出てゆくの？　魂の救済のため？
> **チャールズ**　そう言ってしまうと、ばかに大袈裟でもったいぶって聞こえるな。
> **ジュディー**　そんなこと構わないわ。一度だけでいいし、外に漏れるわけでもないのだから、出て行く本当の理由を話してよ。
> **チャールズ**　うん。おそらく君の今の言い方で当たっているだろう。わたしに残された歳月は多くないから無駄に過ごしたくない。ねえ、書くべき手紙が多くあるのに郵便に間に合わせる時間が十分しかないという経験をしたこと、あるかね？　そういう場合人はいつまでも残るような大事な手紙は書かないものだ。今必要な手紙だけ書くだろう？　デートの日時とか、招待への回答とか些細な手紙だ。それしか時間がないのだから他はどうにでもなれ、というわけさ。それと同じで、わたしは今やりたいことだけするのだ。(『働き手』 257-8)

チャールズの言葉を額面通り受け取るべきか否かという問題はあるものの、彼のジュディーとの関係性、そして二人の会話の流れから判断すれば、彼が全くの嘘を並べているとは考えづらい。ただ、仮に彼の動機が 100%この通りだったとして、筆者が気になるのが「どうして、このタイミングで、チャールズがこうした考えに至ったのか？」という点である。これについては、チャールズの年齢が 40 代前半であることから、こ

の時の彼が「ミッドライフ・クライシス（中年の危機）」に直面していたという可能性があり、筆者もその考えに同意する。

ミッドライフ・クライシスとは、人が心や身体、環境などの変化を経験することで、自身のアイデンティティが揺れて心の葛藤が起きることを意味する。「自分の人生は本当にこれで良いのだろうか？」などと考え、これまでの生き方や自分自身に対する自信を失ったり、悩んだりする期間が続くことをいう。ミッドライフ・クライシスが起こるタイミングは人それぞれで、早い人で 30 代後半、遅い人で 50 代になってからこの状態に陥ることがあるとされているが、性別は関係なく、夫の定年退職や子どもの結婚・独立を経験する 60 代の女性に起こることもある。

ミッドライフ・クライシス（mid-life crisis）という言葉は、カナダ人精神分析学者エリオット・ジャック（Elliott Jaques: 1917-2003）が 1957 年に開催された英国精神分析協会の学術大会の場で初めて用い、1965 年に発表した学術論文“Death and the mid-life crisis”で提唱したことで一般的に認知されるようになった。ただし、ジャックは芸術家の創造性が 40 歳前後で変質することを指してこの言葉を用いたのであって、それは個人の内的な発達変化を示すものであった。しかし、近年、心理学や精神医学の分野で用いられるミッドライフ・クライシスという言葉は、ライフサイクル上の青年期と老年期の間にある中年期に、人がある種の選択を迫られるような状況とそれへの対処行動を指すものである。そうした概念は、カール・グスタフ・ユング（Carl Gustav Jung: 1875-1961）が提唱し、後にエリク・H・エリクソン（Erik Homburger Erickson: 1902-1994）やダニエル・レビンソン（Daniel J. Levinson: 1920-1994）等の研究によって有名になった「ライフサイクル理論」に基づくものである。

ライフサイクルとは人の一生とその経過を円環モデルを用いて説明したもので、ユングは人の一生を 1 日の太陽の進行になぞらえ、40 歳を「人生の正午」と呼び、人生を日の出から日没までの四つの時期（「少年期」「成人前期」「中年期」「老人期」）に分けた。ユングは、各期の間には、彼が転換期と呼んだ「危機」が存在するのだと言い、特に人生の正午にあたる 40 歳を挟んで人生の午前から午後への移行期である中年期の転

換期を、人生最大の危機であると考えた。この転換期は、職業選択、家族の悩み、キャリア、老いなど様々な変化が起きだす時期でもあり、人生の午後における最大の課題は、人生の午前で排除してきた（犠牲にしてきた）自己を見つめ直し、それを自らの内に再度取り入れる「個性化の過程」にあると考えた。

エリクソンのライフサイクル理論は、フロイト（Sigmund Freud: 1856-1939）が提唱した心理性的発達段階という考え方を拡張したもので、人の一生を加齢による生物学的な成熟と衰退のみで捉えるのではなく、出生から、子供、大人、老人に至るまでの発達を包括的に見ていく「生涯発達」という概念で理解しようと試みたものである。エリクソンによれば、一生は「乳児期」「幼児期」「児童期」「学童期」「青年期」「成人期」「壮年期」「高齢期」という 8 つの段階に分類され、それぞれの発達段階において乗り越えるべき課題があり、それが達成できない人は、心理的な危機の状態に陥るとした。

レビンソンは、ユングの理論をもとに、人生の発達段階を四季（人生の四季）になぞらえ、約 25 年の周期で起こる 4 つの発達期（「児童期と青年期」「成人前期」「中年期」「老年期」）を想定した。そして安定期と各発達期の間には 5 年程度の過渡期（トランジション）が存在すると考え、この過渡期に自己と対峙することを通じて人は成長するのだと主張した。レビンソンは 40〜45 歳の人生半ばの過渡期が最も危機的であると考え、この危機期をミッドライフ・クライシスと呼んだ。中年期には「若さと老い」「破壊と創造」「男らしさと女らしさ」「愛着と分離」といった両極性を伴う葛藤が生じ、自己の内部だけでなく外界との関係においてもこれらの発達課題を解決する必要があるとした。レビンソンは、40 歳から 45 歳の成人の約 80%がミッドライフ・クライシスを体験していると述べている。

こうした海外の学者たちによるライフサイクルとミッドライフ・クライシス論を踏まえた上で、日本の精神科医の小此木啓吾は、論文「中年の危機」（1983）の中で独自のミッドライフ・クライシス論を展開している。小此木の論の中で重要な意味を持っているのが「惑い」「上昇停止症

状群（meta-pause syndrome）」「視界ゼロの生き方」という三つの概念である。そして、『働き手』におけるチャールズ・バットルの変節をミッドライフ・クライシス論に照らし合わせてみると、小此木が提唱したこれらの概念を用いることでチャールズの精神状態をより明確に説明できることに筆者は気付いたのである。そこで次章では、これら三つの概念をもとに、チャールズのミッドライフ・クライシスについて考察を行うことにする。

IV

小此木の論の順序に沿って、まずは「惑い」という概念の考察から始めてみたい。小此木は中年の惑いを、「青年期(1)に一応確立した同一性が改めて問われる」ことと定義している。（小此木 213）

> 青年期に選んだ自分自身の生き方、価値観、人生観、職業、配偶者、家庭……こうしたさまざまな対象との相互性の中で身につけたアイデンティティ（同一性）を支えに、生きがいを見出して暮らしてきた人物が、果たしてこのまま年老いていってよいのだろうかという迷いを起こす。この迷いの中に歯止めなく落ち込んでいくと、青年期以来自分を支えていたあらゆる枠組みがすべて無価値、無意味のように感じられてくる。（213）

それと同時に、青年期に自らが行った選択によって排除された様々な可能性がその人物の中で浮かび上がり、もしかしたら、この別の可能性にこそ本当の自分が反映されており、今までの青年期以来の自分の在り方は虚構ではないのかと迷うようになる。とは言え、自らがすでに築き上げた外的な生活環境は未だそのままのかたちで存続しており、こうした外的な世界と内的な世界のギャップの中で自らの可能性について思い

を巡らした結果、むしろ内的世界をよりリアリティーのあるものとして捉えるようになったとき、その人物の中に惑いが生じるのだと小此木は言う。(213)

チャールズ・バットルの言動を、これに当てはめてみると、彼の惑いが浮かび上がってくる場面がいくつかあることが分かる。印象的な次の場面もその一つである。

> **アルフレッド**　さっぱり理解できないな。後生だからわけを教えてくれ。チャーリー。戯れに自殺行為をする人はいない。
> **チャールズ**　動機は単純さ。今朝起きたら、価値なしという結論に達したのだ。
> **アルフレッド**　何が価値なしなのだ？
> **チャールズ**　これまでの生き方だよ。この十二年間来る日も来る日も地下鉄でシティーに行き、昼は株式を売ったり買ったりして過ごし、夕方は同じ地下鉄で帰宅した。そうして月日は巡っていった。もうたくさんだ。反吐(へど)がでるほどうんざりだ。もう世間体に振り回されるのはこりごりだ。もう嫌だ。見てくれ。（ピカピカのシルクハットをとる）職業の印だ。地位と世間体の象徴だ。洒落ていて、粋で、かっこういい。よくご覧。一攫千金(いっかく)の可能性の象徴だ。くそ食らえ！（帽子を床に叩きつけ、踏みつけ、蹴飛ばす）(『働き手』 205)

ここで留意しておかなければならないのが、チャールズの「青年期」は戦争と重なっていたという事実である。第一場のパトリックの台詞（149）から、チャールズの年齢は正確には 42 歳であることが分かる。また、12 年前の戦争終結時には 30 歳であったというチャールズ自身の台詞（下記）もあり、兵役が 5 年間であったことが示されていることか

らも、彼が25歳から30歳までの青年期を戦場で過ごしたことが分かる。（196）そして、そのことが彼の惑いの形成に大きな影響を与えたのである。

> **ジュディー**　帰国した時、パパはひどくしょんぼりしてたんじゃないの？
> **チャールズ**　いや、自分が生きているって考えるととても嬉しかったよ。三十歳だった。自分にこう言い聞かせたよ。「若い頃の大事な五年間を無駄にした。でも不平を言ってもしょうがない。残ったものをせいぜい生かそう」とね。十二年前のことになる。そしてわたしの若さは消えてしまった。（196）

先に説明した通り、通常、惑いは、青年期に自らが行った選択によって排除された様々な可能性を考えるようになることから生じる。しかし、青年期が戦争と重なってしまったチャールズには、その選択肢すら与えられなかったのである。さらには、戦地での極限の体験が、戦後の彼の生き方にも制限を与えたことが窺える。

> **チャールズ**　もちろんそうだ。だがね、自分が前線で何度も間一髪で死を免れたのに、残りの人生をそんな無気力な仕方で過ごしてよいのだろうか、と自分に問わざるをえなかったよ。（197）

戦後、チャールズは家業であった株式仲買人の仕事に就いた。そして、会社を立派に成長させ、周囲の人間から「イギリス中央銀行並みに信用が置ける」と言われるほどに高い評価を得るようになる。（191）しかし、自分の名前が株式取引所で高く評価されることに「無邪気な誇りを抱いていた」と認める半面、彼の内面では、そうした自分の生き方に対する疑問が常に渦巻いていたようである。

アルフレッド　一瞬の衝動に駆られて、生き方をすっかり変え、家庭を破壊するなんて狂気の沙汰だ。この何時間か考えただけで決めたことだろう？
チャールズ　頭で考えたのは数時間だったけど、腹では十二年間考えてきた。（224）

この言葉が示しているのは、チャールズの惑いは 30 歳、つまり戦争から復員したときにはすでに始まっていたということである。「青年期に一応確立した同一性が改めて問われる」のが惑いの定義であるが、「そしてわたしの若さは消えてしまった」（196）という台詞からも分かるように、戦争によって彼は実年齢以上に生き急ぐことを強いられた。その結果、未だ青年期にあるといってもよい 30 歳で、ミッドライフ・クライシスの前兆、あるいは危機そのものが起こり始めていたのだと考えられる。

ちなみに、本作の考察においては、妻であるマージェリーに対するチャールズの冷淡さが指摘されることが多く、作者モーム自身がこの劇を執筆する 1 年前に、妻のシリーと離婚したことが影響しているとの説もある。（287）筆者も同様の考えを持ってはいるものの、あくまでも劇中で述べられていることのみから考えると、戦争が二人の夫婦仲に影響を与えたことは確かであろう。二人が戦前に結婚したことは第一場のジュディーの台詞（149）から明らかであるが、5 年間離れ離れになったことで、かつては相思相愛であった二人の間の恋心は完全に薄れてしまったのである。

チャールズ　前とは見違えるほどだったな。僕が復員したときは互いに他人になっていた。初めからお互いを知らねばならなかった。本当の姿を知った時、お互いにあまり気に入らなかったね。（261）

もちろん、仕事に対してそうであったように、チャールズは妻に対しても世間体という同一性に基づいて「幸福な家庭的な夫婦」（260）を演

じていたのであるが、戦後 12 年、結婚後 19 年目に、ついにその限界が訪れたのである。

さて、中年期の惑いがあれば、逆に「惑わないこと」すなわち「不惑」の状態も存在する。一般的には、青年期に確立した同一性を絶対的に肯定することが「不惑の境地」であるとされるが、小此木によると別の形の選択が取られる場合もあるという。

> 実際には、ほとんどの人々が、内面的には戸惑いながら、少なくとも表面上結局はいままでどおりの暮らしを続けるのがこれまでの常識であった。しかしながら、このように、それまでの社会生活や家庭生活どおりの活動性を再び連続性を保ちつつ発揮するような形でこの惑いを克服するだけが、この危機におけるもっとも望ましい選択であるとは限らない。
>
> 例えばこの惑いのときに、出家したり、奥の細道の旅に出たり、全く世俗的な営みを脱した形で不惑の境地に達する道も、また別の存在権を持っている。内面的な価値観と生き方の転換が起こり、ときには世間的な目で見ると、不適応に陥るかのように見える場合もあるが、本人の体験としては、適応、不適応といった尺度から物事を見なくなる。もっと自由で、もっと開かれた人生観の中で暮らすようになる。
>
> この心の転換を契機にそれまで自分を拘束していた枠組みが外れ、それまで抑圧されていたもっと創造的な自分を実現するようになる。
>
> この意味では、必ずしも青年期に選んだアイデンティティを、絶対に肯定するだけが不惑の境地とは言えない。（小此木 219）

チャールズが自らの惑いの克服のために、「全く世俗的な営みを脱した

形で不惑の境地に達する道」、「ときには世間的な目で見ると、不適応に陥るかのように見える」道を選んだのは明らかである。そうすることで、ようやく彼は 12 年、戦争の期間を含めると 17 年に渡る「自分を拘束していた枠組み」から解放されたのである。

次に、「上昇停止症状群」について考えてみたい。小此木による定義は、以下の通りである。

> 上昇停止症状群とは、青年期以来自分なりに努力し、満足と生きがいを見出しながら暮らすための前提であった、「年とともに地位が上がり、収入が上がり、社会的な力が高まり、家庭も豊かになる」という思い込みが突然破綻することによって生じる心身の症状を言う。(216)

これは、中年期に入った人が、自分が持ち続けてきた上昇志向の考え方が実は幻想にすぎないのではないかと思ってしまうような現実、例えば、仕事上の失敗や、健康上の不安、夫婦や親子関係の破綻等に直面し、もはや自分の人生は上昇中ではなく、むしろ水平飛行か下降線をたどり始めているのだという「上昇停止体験（meta-pause experience)」を得たときに起こるのだという。

チャールズの言動をこのモデルに当てはめてみると、投機に失敗した顧客の自殺から始まった会社の危機が、彼にとっての上昇停止体験になったと見ることができる。

> **チャールズ**　今朝家を出た時は、とても爽やかな気分だった。財産をすったのではなく、財産を築いたと、わたしを見た人は勘違いしただろうな。戦地から戻って以来、毎朝していたように地下鉄の駅まで歩いた。知り合いの数人に会釈した。皆、わたしと同じくロンドンのシティーに向かっている。駅に着いた。い

つものように混雑していた。その時急に心が沈んだ。

ジュディー　どうして？

チャールズ　ここ数日の間、もう駄目だと思うことが数回あった。そういうときは、夜ベッドに入ってから、眠れぬままにあれこれ頭に浮かんだ。もし破産したらどうするかを考えてみた。詳細な計画を立ててみた。それが心をなごませた。失敗を前向きにとらえられると思った。そして、どうにか嵐を切り抜けた。だから今後も死ぬまで、これまで十二年間やってきたのと同じく、地下鉄で会社に行き、市場をしらべ、株の売り買いをやって行くことが可能になった。ところが、突然、破産は生命と自由を意味するような気がした。逆に、シティーに急ぐ乗客を乗せる地下鉄は束縛と死を意味するように思えたのだ。そこで、ハムステッドヒースに散歩をしに行ったのだ。（『働き手 193）

この時点でのチャールズは取引銀行の頭取から融資の確約を受けており、会社の再建に目処が立った状況にある。それでも、一度は最悪の事態を覚悟した彼には、上昇停止体験が起こってしまったようである。小此木によると、上昇停止体験は、青年期から人々を駆り立てていた、この世的な人生のさまざまな価値の追求、社会生活や家庭生活への適応といった、いわば適応主義的な生き方のはかなさや空しさを対象者に気付かせる。（小此木 217）チャールズが破産を免れたことによって、「今後も死ぬまで、これまで十二年間やってきたのと同じく、地下鉄で会社に行き、市場をしらべ、株の売り買いをやって行くことが可能になった」ことに気付いたとき、「シティーに急ぐ乗客を乗せる地下鉄は束縛と死を意味するように思えた」のは、そのためである。

上昇停止症状群を患うと、これまでの日常生活で当然のことと思い、疑いなど抱かなかったすべての現実が大きく揺らぎ、その結果、漠然と

した不安、焦燥、抑うつ感を覚えたり、重症の精神病病状が生じることも珍しくないと小此木は説明する。(217) しかし、舞台上のチャールズには、そうした兆候は見られない。その理由の一つとしては、やはり彼の戦争体験が挙げられよう。彼の青年期と戦争が重なっていることについては前項で説明したが、そこに上昇停止症状群という概念を加えてみると、彼は青年期の日常がすべて覆されるという、究極の上昇停止体験をすでに経験してしまっていることが分かるのである。その証拠に、復員した直後の彼の精神状態が不安定だったことは、第三場での彼とマージェリーとの会話の中で明らかにされている。(『働き手』 262) その後、彼は表面的には平静を取り戻したのであるが、その内面では上昇停止症状群の影響を受け続けていたのであろう。劇中では、チャールズがいかにユーモアのセンスが欠落した人物であるかということが、登場人物たちによって繰り返し言及されるが、これも症状が続いていたことの証拠であると筆者は考える。

小此木は、上昇停止体験の中では「だれもがある種の実存主義者になる」と言う。(217) 突然こうした人生の限界に直面して、自分というものが一つのまとまりを持つものとして視野に入るようになるからである。そのため、自分の生き方に対して深刻な疑問を抱き始め、「できることならば、もう一度人生をやり直したい」とまで考えるようになる。チャールズの「頭で考えたのは数時間だったけど、腹では十二年間考えてきた」(『働き手』 224) という台詞は先に紹介したが、彼は腹の中、つまりは心の底で、生きる道を自分で切り開き、今ここにあるひとりの人間の現実存在(=実存) としての自分のあり方を、12 年もの間模索し続けてきたのだと考えられる。そして、会社の危機に直面し、それまで日常的に自明のこととして頼りにしていたすべての枠組みの解体と既成の自己の崩壊が再び起こったことにより、新たな上昇停止体験を経て、それまで押さえつけてきた自身の解放へと舵を切ったと考えられる。小此木は、「もし新しい自己を実現しようとする内面的な心情のまま行動してしまう場合には、社会不適応をもたらすおそれがある」(217) と述べているが、チャールズの自己実現はまさにこれを体現したものになっている。

最後に、「視界ゼロの生き方」について考えてみたい。視界ゼロの生き方とは、エリクソンが定義するところの「相互性（mutuality）」を得るために、小此木が提唱する生き方である。エリクソンは、人の心は周囲の人々や社会環境との相互作用を通じて成長すると考え、その相互作用を展開するための能力を相互性と呼んだ。伝統的な価値観や生活様式が安定している社会では、個々人の社会における役割構造もある程度固定化されていたため、人々は比較的安定した人生設計を立てることができた。この枠組みの中では、それぞれのライフステージにおける発達課題もまた伝統的な価値観や習慣によって決定され、その社会に属する人たちの間で共有されていたために、人々は伝統と慣習に従ってそれぞれの発達課題を達成することができた。つまり、多年にわたって蓄積された人生経験と既成観念に基づいて一定の長期的な人生設計と目標を立て、この目標に到達するという形で、現在の生き甲斐を見出す「有視界の生き方」をすることによって、危機を脱することができたのである。(251)
ところが、変化のスピードが速い現代社会においては、人生設計も発達課題も流動化しており、既成の価値観念を発達課題の遂行のための拠り所にすることが難しくなっている。そこで、現代人が相互性を発揮し、心理的成長を達成するために視界ゼロの生き方が必要であるというのが小此木の主張である。

> 視界ゼロの生き方とは、決して盲目飛行を意味しない。
>
> 第一に、それは、既成観念による予測と期待が、まだどれだけ通用し、すでにどれだけ無効化しているかを明確に識別する現実吟味（reality testing）を行い、
>
> 第二に、既成観念の無効化した領域における眼前の事象を、既成観念にもとづく思い込みや憶測を排して、ありのままに正確に認識し、その意味を正確によみ取り、その時点で、有効適切な適応様式を速やか

にフィード・バックし、

第三に、これらの適応様式が常に短期的にしか有効でない事実をわきまえ、それ以上の未来は、常に未知、不可知である、と知りながら、そのような知の空白から逃避することなく、この「先のわからない」心的な苦痛と不安に耐える能力を身につけ、

第四に、それは、個々の年代、状況における社会、家族とのかかわりの根源になる一貫した真の自己を心の拠り所としつつ、随時随所に、柔軟で多様な一時的暫定的な自己を次々に発揮してゆく。

このようなソフトな自我に支えられた視界ゼロの生き方の体得こそ、前人未到の高齢社会のパイオニア―となる現代中年の、もっとも差し迫った精神的課題ではなかろうか。(252)

小此木の説明を要約すると、視界ゼロの生き方とは、既成観念に囚われることなく、現実をフラット（ありのまま）に認識した上でそれらにどう適応していくのかを決め、同時にそうした適応が一時的なものであるという事実を受け入れ、そこから逃げずに自己の信念を尊重しつつ柔軟に他者や社会とかかわって行く生き方である。それを踏まえて、上記の視界ゼロの生き方を実践するための四つの段階について、チャールズの言動から考察してみたい。

第一の「現実吟味」については、チャールズと彼以外の登場人物、特にマージェリーとアルフレッドとの会話の中で、彼が冷静に既成観念の識別を行っていることが分かる。

チャールズ　君たちのために僕がいつまでもあくせく働くべきだと本気で思うのかい？　それも生活必需品だけでなく、なくても済む贅沢品を買うためにだよ。

マージェリー　それくらい望んだって当然だわ。
チャールズ　生き甲斐については？　どこに生き甲斐があるのだ？
マージェリー　どういう意味？　稼いでくるのが生き甲斐よ。普通の男は、家族に望むものを提供して喜びをえているわ。それが普通の生き方よ。
チャールズ　そんな生き方に価値があるだろうか？
（『働き手』 265）

アルフレッド　くだらんことを言うな。女性が自分なりの意味ある人生を送りたいとかいう話はよく聞くがね。わたし自身は、ばかばかしい話だと思うけど、まあそれはそれで結構さ。だがねえ、男が意味ある人生を送りたいなんて、そんな話は聞いたことがないよ。ありえないことだ。
チャールズ　たまには、女性の真似をすれば、女性に敬意を表することになるだろう。
（223）

マージェリーもアルフレッドも、伝統的な価値観、特に男女の役割についての既成観念にどっぷりとはまったままでいる。彼らの意見に異議を唱えるチャールズは、すでに現実吟味を行った上で対応していると考えても良いであろう。

第二の「既成観念が無効化した状態での現状の正確な認識と、適応様式の速やかなフィード・バック」をチャールズが実践していることは、以下のやり取りから読み取ることができる。

マージェリー　とにかく理解できませんよ。そんなばかげた話、聞いたこともないわ。けんかしたり大騒ぎをするでもなく普通にお喋りしていて、ごく気軽

に別れようと言い出すなんてありえないわ。それじゃまるで、家で働いていた運転手が、「もっとよい職につきので、辞めます」と言うみたいじゃありませんか！

チャールズ　いや、そうじゃない。年取った召使いが、「もう歳ですので、当然の報いとして暇を取らせて頂きたい」と主人に告げるようなものだな。

マージェリー　バカげているわ！　わたしや子供を見捨てる理由などないはずよ。

チャールズ　夫と父親の役目を充分果たしてきたじゃないか。喜びも利益も得られなくなった仕事は辞めるべきだとおもうのだ。(217)

チャールズの変節は周囲の人間にとっては突然のことであっただろうが、この第二の段階を踏んでいたと考えれば、突飛な行動ではなかったことになる。

第三の「適応様式の有効性が短期的である事実をわきまえ、先のわからない心的な苦痛と不安に耐える能力を身につける」ことについては、チャールズの適正は抜群である。

アルフレッド　君が女と駆け落ちするのでないというのなら、なぜ出て行くんだ。

チャールズ　自分がうんざりしている仕事をして、自分が関心を持たない家族のために時間を無駄に過ごす気がなくなったのだよ。自分を大事にする生き方がしたい。これまで家族のために十二分に責任を果たしてきたつもりだ。未来は自分のためだけに生きたい。

アルフレッド　具体的に何をするつもりだ？

チャールズ　まだ考えていない。これからじっくり

と考えるよ。

アルフレッド　大まかな考えはもうあるのだろう？

チャールズ　一度しかない人生だ。振り返って戦死した友人のことなど思うと、株を売ったり買ったりし、財産を築いたり失ったりするより、もっと有意義に人生を使いたいとおもうのだ。(223)

この場面においてもそうだが、劇中の他の箇所でも、チャールズは出奔後の計画について常に現実的であると同時に楽観的である。彼は、現状からの脱却が、自らの今後の人生の成功を確約するものではないことを知っている。それゆえに、自らに残した 5 千ポンドの資産の利潤で週 5 ポンドの最低生活費を確保するという、現実的な生活基盤を構築したのである。しかし、彼は将来の具体的ビジョンを何も持っていないことも明かしており、「とりあえず海外に出てみれば何とかなるだろう」程度の考えでしかない。それでも、そうした不安定さに心的な苦痛と不安を感じているかといえばそのようには見えない。筆者は本論の冒頭で、チャールズが「実のところ場当たり的なのである」と書いたが、この第三の段階に照らし合わせてみると、彼の言動はむしろ必然的であったのだともいえよう。

さて、問題は第四の段階である。チャールズは第一から第三の段階を経て「個々の年代、状況における社会、家族とのかかわりの根源になる一貫した真の自己」を確立することには成功している。しかし、それを心の拠り所としつつ「随時随所に、柔軟で多様な一時的暫定的な自己を次々に発揮してゆく」ことを完全に放棄して、会社や家族、友人を捨てて海外に旅立ってしまうのである。彼が視界ゼロの生き方を極めることができなかった理由を考えると、これまた戦争に行き着くことになるが、これについてはドロシーが鋭く何かを感じ取っているようである。

アルフレッド　男が仕事も家庭も何もかも放り出す時は、何か理由があるはずだ。

ドロシー　そうね。ただ面白いからってそんなことをするわけないもの。
アルフレッド　弁護士を長くやっている経験からすると、普通の男の場合、理由は二つ、金か女かだ。
ドロシー　そういうことにかけてはあなた以上に通じている人はいないわね。
アルフレッド　他に理由などあるものか！
ドロシー　何というか、精神的な動機（筆者注：some spiritual motive）とでもいうようなものがなかったかしらね？
アルフレッド　その可能性は排除できない。頭がおかしくなったのかもしれないから。
ドロシー　わたしが言うのは一寸違うの。理想のようなものがあって、そのために出て行くのじゃないかしら？
アルフレッド　何をばかなこと言っているのだ。本の読み過ぎだ。普通の勤め人は理想のために動いたりしない。
ドロシー　でもチャーリーは戦争以来、普通じゃなかったわ。（228）

ここで重要なのが、ドロシーが「戦争後」ではなく「戦争以来（since the war）」と言っている点である。先述した通り、復員後のチャールズが情緒不安定であったことは本人も認めているところであり、マージェリーによると「あなたは美しい理想主義をすっかり失っていた。そう、愛国心さえ失ったわ。飲みすぎるようになり、下品な言葉を使うようになった」のだという。（262）しかし、ドロシーが指摘しているのは、そうした一時的な精神状態の乱れではなく、戦争から帰って来た彼が以前とは別人になっていたということである。つまり、この 12 年もの間、彼女は、チャールズの言動に違和感を覚え続けていたということである。

戦争がチャールズに与えた影響については、すでに惑いや上昇停止症状群の考察の中で触れたとおりである。青年期が戦争の期間と重なったことで、彼は通常とは異なる発達過程を経ることを余儀なくされたのである。その結果、彼は内面的にはすでに一度目のミッドライフ・クライシスを体験してしまったのであろうと筆者は考える。それゆえ、彼の内面においては、レビンソンの発達段階説における「老年への過渡期」がすでに起こりつつあると推察する。42 歳の彼は、肉体的には衰えを感じているようには見えない。それどころか、散歩に出かけたハムステッドヒースで昼食のためにパブに入り、そこで骨付きローストと一緒にワインを一瓶空けてしまうほどの健啖振りである。(187) それにもかかわらず、彼が繰り返し口にするのは「残された歳月は多くない」(257)、「時間がない」(258)、「時間の無駄」(225) といった、自らの生涯のタイムリミットを意識した言葉なのである。これは、彼が戦争で多くの死に直面したことによって、人の死はいつでも起こり得るという事実を受け入れざるを得なかったことに起因していると考えられる。そして、この死の意識と一度目のミッドライフ・クライシスによる内面の変化、さらに今回の「二度目」の中年の危機を経て、彼は中年でありつつも老年の過渡期の発達課題に取り組むことになったのだ。レビンソンが言うところの中年期の「人生半ばへの過渡期」にのみ向き合うのであれば、チャールズは来るべき老年期に備え、小此木が言うところの「ソフトな自我に支えられた視界ゼロの生き方」を選択することができたであろう。しかし、内面的には二度目の中年の危機を迎え、老年の過渡期を同時に向き合わなければならない彼にとっては、そうした生き方をするには文字通り「時間がない」のである。もうすでに、彼は自らの「魂の救済」(257) を意識するフェーズに入っており、単なる中年の危機を超越した精神状態になっているのである。

V

本作の英文タイトル *The Breadwinner* は、一家の働き手（稼ぎ手）を

意味する言葉であり、その大黒柱が突如その地位から降りることを宣言した際に起こるドタバタ模様を描いた、サマセット・モーム最後の喜劇である。ただし、本論においては家族や友人・知人たちの狼狽振りにはあえて焦点を置かず、主人公チャールズの変節をライフサイクル理論のミッドライフ・クライシスという概念によって説明することを試みた。

その結果分かったことは、あまりにも唐突かつ突飛に描かれ、それゆえに本作の喜劇的要素の中心ともなっている彼の出奔が、実は誰にでも起こりうる中年期の危機から生じたものであったということである。ただし、チャールズのミッドライフ・クライシスは、戦争という人間の精神と肉体の両方に極限の負荷を強いる状況によって大いに影響を受けたことで、やや特殊な方向性を辿るに至ったということも言及しておく。実際、モームの後期四作は最後に書かれた『シェピー』を除いて、すべて第一次世界大戦がテーマの一部になっている。本戯曲が書かれた 1930 年に 56 歳であったモーム自身も、中年期から老年期の過渡期にあって、離婚問題や劇壇からの引退等も引き金となってミッドライフ・クライシスの真っ只中にいた可能性が高い。さらには、大戦時に野戦病院勤務から諜報部門へと移籍し、あらゆる角度から戦争を体験したモームにとって、本作を含めた最後の戯曲の執筆時に戦争への想いが投影されたことは、ある意味当然のことと言えよう。

劇場との縁を切った後、モームは作家としてますます旺盛な創作活動を行っていくことになるのだが、それは過去の自分と決別し新天地で生き生きと暮らしているチャールズ・バットルの姿を彷彿させるのである。

＊　本稿における *The Breadwinner* からの引用文の訳については、1966 年に出版された Heinemann の *The Collected Plays of W. Somerset Maugham: Volume Two* （Reprinted Version）や別版の原典、1985 年出版の英宝社版（井出良三 / 久保田重芳 訳）を参照した上で、2018 年に講談社から刊行された行方昭夫氏による『報いられたもの / 働き手』および「サマセット・モーム翻訳ブログ」

にて公開されている宮川 誠氏による『わが家の稼ぎ手』の訳を参考にさせていただき、引用箇所については行方訳のページを示すことにした。また、タイトルの日本語訳についても、行方訳の『働き手』で統一した。

注

(1) 小此木によると、後期青年期（late adolescence）から後青年期（post-adolescence）までを青年期と呼ぶ。

参考文献

鎌田 實　『ミッドライフ・クライシス』　青春新書　青春出版社、2021 年。

河合隼雄　『中年危機』　朝日文庫　朝日新聞出版、2020 年。

小此木啓吾　「VII 中年の危機」　『岩波講座　精神の科学 6 ライフサイクル』　pp.211-254.　岩波書店、1983 年。

高橋祥友　『中年期とこころの危機』　NHK Books 886 日本放送出版協会、2000 年。

行方昭夫　『モーム語録』　岩波文庫　岩波書店、2010 年。

行方昭夫　『モームの謎』　岩波現代文庫　岩波書店、2013 年。

藤野敬介　「サマセット・モームの『聖火』における三つの愛」『Walpurgis 2023：國學院大學外国語文化学科紀要 / 國學院大學外国語文化学科 編』pp.17-39. 國學院大學外国語文化学科、2023 年。

松尾恒子、康 智善、友久茂子、番匠明美、福井裕子　『改訂版 ライフサイクルの心理学 ― こころの危機を生きる ―』燃焼社、2004 年。

W. S. モーム　『スミス / 生計をいとなむもの』　井出良三 / 久保田重芳 訳　英宝社、1985 年。
W. S. モーム　『報いられたもの / 働き手』　行方昭夫 訳　講談社文芸文庫　講談社、2018 年。

Maugham, William Somerset. “The Breadwinner.” *The Collected Plays of W. Somerset Maugham: Volume Two.* Reprinted Version. London: Heinemann, 1966.

ウェブ資料

W. S. モーム　『わが家の稼ぎ手』　宮川 誠 訳　サマセット・モーム翻訳公開ブログ https://wsmaugham.jimdofree.com/（参照 2024-1-6）.
“How the Midlife Crisis Came to Be.” The Altantic. https://www.theatlantic.com/family/archive/2018/05/the-invention-of-the-midlife-crisis/561203/（参照 2024-1-6）.
Elliott, Jaques. “Death and the mid-life crisis.” *The International Journal of Psycho-Analysis*. Vol. 46. (Jan 1, 1965). https://www.proquest.com/openview/f7931fc061e53e99298006613e0a9bd5/1（参照 2024-1-6）.